《シリーズ企画》

神谷傳兵衛没後100年

問　文化芸術課（牛久シャトー内）☎874-3121

神谷傳兵衛と西尾市

生涯で60を超える会社の創設に関わる

「日本の近代産業の父」と呼ばれる渋沢栄一とも交流のあった神谷傳兵衛は、三河国幡豆郡松木島村（現愛知県西尾市）に、名主の長男である神谷兵助の6男として生まれました。

17歳で故郷から横浜に出てきた後、多くの文化人に愛された浅草の神谷バー、日本有数のワイナリー・牛久シャトーを創設し、「日本のワイン王」とも称される神谷傳兵衛は、生涯60を超える会社の創設に関わりました。なかでも三河鉄道の敷設、路線拡大は郷土の発展に大きく寄与することとなりました。

三河鉄道の中興の祖

三河鉄道は開業当初、思うように業績があげられず低迷していたため、三河鉄道の株主たちは、創立時からの取締役の一人である郷土出身の成功者、神谷傳兵衛に再三社長就任を要請。当時筆頭株主だった傳兵衛は鉄道事業の重要性に鑑み、大正5（1916）年、要請に応え、三河鉄道の社長に就任しました。

社長に就任した傳兵衛は、三河鉄道発展には知立～挙母～越戸に至る路線の延伸が急務であるとし、自らも東京から自動車で新線沿線に赴き、協力を求めました。『七州城沿革小史』によると、傳兵衛は三河鉄道の株式を集めるため、62回も足を運んでいるそうです。

当初、駅を置く地元が株券を負担することや駅建設用地の寄付、線路用地の売渡価格には上限があることなどが三河鉄道側の条件として決められていたため、新線沿線の協力はなかなか得られませんでした。しかし、傳兵衛をはじめ三河鉄道側の熱心な活動に心を惹かれ、次第に協力者も増えていきました。鉄道新線建設は工事と資金集めのいずれもが順調に進み、大正11年には越戸まで全線開通。さらに、北部線・南部線の延伸も事業化し、旅客・貨物ともに利用者は日増しに増加しました。第1次世界大戦の好況も重なり、三河鉄道の業績は回復。傳兵衛は三河鉄道の中興の祖となり、郷土の発展に尽力したのです。

大正15（1926）年に三河鉄道が一色まで延伸された際には、傳兵衛の功績を称え、出身地である松木島の駅名は「神谷駅」と命名されました。神谷駅は当時としては珍しい貴賓室を備えた鉄筋コンクリート製の立派な駅舎でした。その後、三河鉄道は1941年に名古屋鉄道と合併、名古屋鉄道三河線となりますが、2004年に廃線となり、傳兵衛の故郷にある松木島駅（旧神谷駅）も廃止されました。近年まで神谷駅時代（1926～1949）の構造物も残されていましたが現在は撤去され、三河鉄道時代の面影はありません。神谷傳兵衛の故郷愛知県西尾市に残る足跡は、松木島八幡社に傳兵衛が寄贈した石灯篭がただ一つ残されているだけです。

▲傳兵衛が寄贈した石灯籠
傳兵衛の名が刻まれています▶

comment

「神谷傳兵衛没後100年記念特別展示」の開催によせて

西尾市長　中村 健

神谷傳兵衛は、三河国幡豆郡松木島村（現愛知県西尾市一色町）で誕生しました。17歳で故郷を出て酒造業の成功から財を成し、さまざまな事業に邁進して中央財界で隆盛を極めていましたが、郷土愛を忘れることはありませんでした。その一例が地域の発展に大きく寄与した、地元を走る唯一の鉄路・三河鉄道（名鉄三河線の前身）への貢献です。会社が財政難に陥り存続が危ぶまれた時、傳兵衛は、自ら取締役社長に就任して立て直しを図り、窮地を救いました。また一色までの路線延長の際には、郷里松木島に当時の地方駅には珍しい鉄筋コンクリートの立派な駅舎を建造しました。松木島の駅は「神谷駅」と名付けられ、傳兵衛の功績を讃える象徴となりました。残念ながら路線の一部は廃線となり、駅舎も取り壊されてしまいましたが、「神谷駅」の名とともに傳兵衛の遺徳は今もなお人々の記憶に刻まれています。今後とも牛久市と西尾市双方の郷土の偉人・神谷傳兵衛の結んでくれたご縁と両市の発展に心を砕いた精神を末永く受け継いで参ります。

（一部抜粋）